野性味あふれたきみへ

志茂田景樹（作家）

小学生の頃、我が家で猫も犬も飼っていた時期が3年ほどありました。犬のほうは雑種ながらやや大型犬で、その名はジョンでした。

猫の名は忘れました。決まった名がなかったのかも知れませんが、僕は、ねえ、と呼んでいました。ねえ、ちょっと、と呼びかけるときの（ねえ）です。ジョンもねえもそろって野生味にあふれていました。夜間は放し飼いにするジョンは近所の鶏小屋を襲い、父も母もその尻ぬぐいで大変でした。夜間もつないでおくようになると、今度は一晩中遠吠えを続けました。

我が家は野中の一軒家ではなく、その頃は旧国鉄の官舎に住んでいました。苦情がきて、その後のジョンには悲しい運命が待っていたのですが、ここではねえが主役です。これからは、ねえだけの話になります。

ねえは黒トラでした。しなやかな体つきで、尾も長くて、その尾を子猫のときからよくピンと立てて歩きました。ねえは生後1か月そこそこのときに、次姉が同級生の家から貰ってきて我が家の飼い猫になりましたが、その当時から野生的で、庭の花壇の花々の間や、雑草の茂みから不意に躍り上がり前足で空気をひっかきました。

何をしているのかとよく見ると、花壇の花や、雑草の花に飛んでくるシジミチョウや、ミツバチを襲撃しているのでした。ねえは虚しく空振りを続けましたが、次に見たときには確率高く爪にかけていました。食べるわけではなく、ピシピシと前足を振って飛ばしていました。

30戸足らずの官舎で猫のいない家はどこもネズミに悩まされていました。ねえが初めてネズミを捕ったのは、我が家へきてから7、8か月の頃でした。そのとき、台所の板敷きの間で母と近所のおばさんと僕の3人がおやつをしていたのですが。そこへねえはそろりと入ってきて、茶箪笥を見あげてしきりに鼻をうごめかしました。それから頭を低めて茶箪笥と壁の隙間を覗く仕草をしました。その隙間はねえの顔の半分ほどの幅しかありません。

それからはすべてが一瞬のことでした。ねえは前足で茶箪笥の背板をガリッとひっかくや否や、電光石火の勢いで茶箪笥の正面を回りました。

それより早く反対側の隙間からネズミが飛び出したのですが、ねえは逃げるネズミをジャンプして追いすがって押さえつけるように捕まえました。

「よくやった、よくやった！」

母が興奮したように叫び、僕はポカンと口を開けて呆気に取られていました。

ネコ科の野生の凄みを見せつけられて度を失っていたのかもしれません。

ねえは、いつの間にか、いっとき、僕と仇敵のような間柄になりました。学校から帰ると、我が家には誰もいないことが多かったのです。父は勤めで、母は夕ご飯用の買い物に行っており、2人の姉のうち上のほうは市役所勤務で、下のほうは女子高生で、まだ誰も帰宅していなかったのです。おっと、ねえも殆ど留守でした。

僕はランドセルを投げ出すと、少しの時間ゴロリと畳に横になるのが好きでした。あるとき、寝返りを打つと少し開けられた襖の陰から、ねえが顔を3分の1ほど出して僕を見ていました。片目だけで僕を射るように見ているのです。

獲物を見る目だ、と僕は思い、ゾクリとしました。草食動物に、それもムースのように猛々しい草食動物になったつもりで、僕は四つん這いになりました。そして、じりじりとねえへ近づいていきました。負けずにねえの片目を睨みつけながら。

ねえはパッと反対側へ跳びました。僕はすかさず襖の間を駆け抜けました。その部屋にねえの姿は見当たりませんでした。

上で威嚇の唸り声がしました。見あげると、ねえが鴨居にいて窮屈そうに背筋を反らし下肢をたわめて、僕を睨み下ろしていました。僕は躍り上がるような恰好をして、グワーオッ、と吠えました。

ねえが柱の中ほどへ跳び、その反動を利用して畳へ飛んで台所へ逃げ込みました。ガラガラ、バタバタバタン、と大音響が轟きました。茶箪笥に跳び上がったねえはその上に並べてあった大小のこけし人形をなぎ倒し転がし落としたのでした。

ねえとはそんな狩猟ごっこをしばらく続けました。ある日、押し入れの上段から襲ってきたねえを、中腰になって迎え撃った僕は額に傷を負いました。つい本気になったらしいねえの爪の餌食になったのでした。

一筋かなり深くついた傷は、何年か経っても跡になって残っていました。

その傷の痕跡が完全に消えたとき、ねえはもうこの世にいませんでした。

ねえ、きみのような猫はもういなくなったよ、やたらいるのはただのペットだよ。

画・山中翔之郎

志茂田景樹（しもだ・かげき）作家。1940（昭和15）年、静岡県生まれ。保険調査員、週刊誌記者等を経て文筆生活に入る。推理小説、伝奇小説、ユーモア小説、歴史小説、絵本、児童書など多彩な作品群で人気を集める。大胆なカゲキファッションでも知られ、自身のブランドでデザインも手がける。また、「よい子に読み聞かせ隊」を結成し、隊長として読み聞かせの全国行脚を行っている。主な作品に直木賞受賞作の『黄色い牙』、文芸大賞受賞の『気笛一声』、日本絵本賞読者賞の『キリンがくる日』等。